毎日新聞
（第3種郵便物認可）
1999. 11. 1

高齢者支援に障害者スタッフ

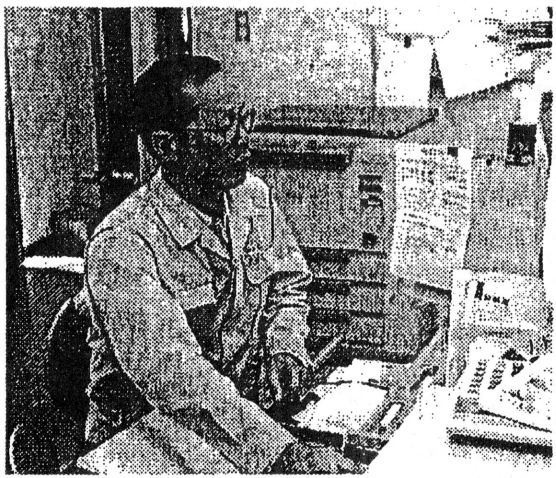
来春オープン予定「共生舎なんてん」

散歩や話し相手

町も協力

石部

軽度の介護が必要なお年寄りを自宅で、家庭的な雰囲気の中で預かる介護サービスのスタッフに知的障害者が加わる全国的にも珍しい試みが、石部町で進んでいる。知的障害者を雇用している民間企業のなんてん共生舎なんてんは、訪問介護事業と地域宅老事業が2本柱。事業所として、町中心の住宅地に2階建ての民家を購入した。訪問介護はヘルパー5人体制で、介護福祉士2人を配置。介護保険のサービス事業者の指定を目指している。



共生舎なんてんの構想を巡らす溝口さん

宅老事業は介護保険外の独自のサービス。1日に5、6人のお年寄りを預かり、散歩や読書、園芸など利用者の意向に合わせて時間を過ごす。利用時間は午前7時～午後7時まで。利用料は未定。調理など、自分で出来ることは自分で担当することで、痴呆や虚弱の進行を遅らせる効果が期待されるという。

運営スタッフのうち、介護が必要な部分はヘルパーが担当する。地域住民のボランティアも活用するが、なんてん共働サービスで働いている障害者にも加わってもらう。

同社社長の溝口弘さん(51)は「散歩の付き添いやお年寄りの話し相手など、障害者にもできる分野はある」と説明。現在、住宅の段差解消などの改修の準備中で、来春までには事業を始めたい意向だ。

なんてん共働サービスは18年前に設立。現在、障害者9人を雇用し、ビルメンテナンスなどを請け負っている。知的障害者のグループホームも運営。「地域で障害者を支えてきた実績を高齢者福祉分野で生かせないか」と考え、今回の構想につながった。

宅老事業で預かるお年寄りは、介護保険の要介護認定で「自立」「要支援」と判定される軽度の人を想定しており、同町も保険サービス外の高齢者支援策として注目している。服部祥雄・同町保健福祉課長は「地域福祉の充実に向けて住民側からあった具体的な提案。前向きに支援したい」と歓迎している。

共働サービス（同町石部南6）が来春のオープンを予定している「共生舎なんてん」。ヘルパーとボランティア、障害者のチームが高齢者を支え、お年寄りと障害者が支え合う新たなノーマライゼーションの在り方を模索する舞台だ。【宇城 克】